

回 答：演 者

今回のブタの歯肉においては測定を行っていないが、ヒトの場合、犬、ラットの測定結果では大きな差は認められていない。

千葉 清\*, 山口 一成\*, 藤森 俊介\*,  
 柘植 信夫\*, 石橋 薫\*, 田熊 和夫\*

演題6 Panex X100による積分吸収線量の推定

○守口 憲三, 緒方 邦敏, 村井 竹雄

岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座

近年歯科領域において上下顎骨にアーチ形に植立する歯列を、一枚のX線フィルム上に総覧的に写し出す、パノラミックスラジオグラフィの技法が広く臨床に応用されてきている。従来のデンタルフィルムで上下全歯牙ならびに、その歯周組織を撮影するには、少なくとも10枚のフィルムが必要である。このときの患者被曝積分線量は少なくとも、500gram-rad と推定されている。そこで本学で使用されている Panex X100の装置を利用して積分吸収線量を推定してみた。用いた方法はバンアーケン等の報告による方法を利用し、次の式から得られた。

$$Et = 86.9 \times \frac{\rho}{\mu a} \times A (\text{cm}^2) \times X (\text{R/sec}) \times T (\text{sec})$$

結果は111~185 gram-rad の間と推定された。よって本学で使用されている Panex X100 の積分吸収線量はデンタルフィルム10枚法での積分吸収線量の少なくとも半分以下の値であると推定された。

特別講演 座長 藤岡 幸雄

歯学領域におけるレーザ応用の現状と将来

○山本 肇

東北大学教授(歯学部口腔病理学講座)

ご講演の要旨は、本号誌(4巻1号)3頁~11頁に総説として掲載されています。

一般講演 座長 石川 富士郎

演題7 岩手県立中央病院歯科口腔外科における過去3年間の入院患者の観察

○小川 邦明, 小口 順正, 岡田 俊司,

岩手県立中央病院歯科口腔外科  
 岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座\*

私達は昭和50年9月から昭和53年8月までの3年間に岩手県立中央病院歯科口腔外科に入院した100名を対象に臨床的観察を行なったので報告する。

年別入院患者数は昭和50年8名, 昭和51年35名, 昭和52年38名, 本年は8月迄19名の合計100名で, 3年間の新患総数3,332名の3.3%にあたる。

性別では男性34名, 女性66名で女性が多く, 男女比は1:1.94であった。また年令別では20才代が多く, 次いで30才代であった。

月別患者数では6月, 1月, 11月が多かったが, 症例が少ないため特徴ある傾向は認められなかった。一方地域別では盛岡市が最も多く26%で, 次いで久慈市の13%であった。

来院経路は53%が紹介で, そのほとんどが院内および他の県立病院からの紹介であった。

診断名別では嚢胞33例, 炎症23例, 腫瘍12例で内訳は良性腫瘍10例, 悪性腫瘍2例, 以下外傷10例, 奇形5例, 埋伏歯5例, 血液疾患4例, 粘膜疾患4例, その他4例である。

入院日数は平均22.3日, 悪性腫瘍の平均106日, 炎症では9.2日, 嚢胞では10.1日, 奇形19.8日, 外傷29.1日であった。

入院患者のうち, 手術を行なった症例は68例でこのうち10例は外来で行なっている。中央手術場を使用した手術症例は58例で, その内訳は全麻22例(37.9%), 局麻(62.1%)となっている。

手術名別では嚢胞摘出術20例(34.4%), 良性腫瘍摘出術8例(13.8%), 腐骨除去術8例(13.8%), 口唇形成術4例(6.9%)で Minor Surgery が多かった。

以上私達は3年間の入院患者について臨床的観察を行なったが, この分析で当科の存在意義を確認すると同時に今後本病院の移転に際して充実の方向へ努力したいと考える。

追 加: 石川 富士郎(矯正歯科)

(1) 貴科の入院施設発足時からの3年次までの統計的観察を試みられたわけですが, 教育研究病院である大学の口腔外科のそれとは自ら違いがあると思う。むしろ貴病院が全国的には県立病院乃至は診療所を多数

かかえての中央病院という性格の中で、京都の病院、それも近隣に大学病院があつた環境で考えてみたときの考察は如何にすすめていったらよいでしょうか。

(2) 発足時から今日の統計的観察は、明日の県立中央病院の一科としてのあり方や拡充計画など一つの基礎資料となり得ましょう。むしろそこに今回のご発表の目標もあるのではないですか。

この(1)、(2)をとおして今後の一科の手術、そのための入院という患者行動についての思考がもたらこんなよいことはありません。

質 問：黒田 政文 三沢市開業（口腔病理）

1. 開業医としては、患者の流れに可成りの関心があるのですが。

ご発表によりますと、院内紹介が約50%近いとようですので、患者来院時（初診）の診療科目の認識がたりないのではないのでしょうか。

また、例えば、内科、外科等の外来から転科するのも多いのは歯科口腔内疾患が内科的、外科的な所見が併発または原発のためでしょうか。

2. 市内歯科医院よりの紹介が少ないのはどのように考えられますか。

回 答：演 者

1) 始めのうちは口腔外科の疾患の認識不足から他科を受診するケースが多かったが、受付に看護婦を置き口腔領域の疾患の場合には来科させるように指導したところ、最近では直接来科する症例が多くなっている。

2) 開業医からの紹介は少なく、むしろ院内や他の県立病院からの紹介が多い。開業医に対してもPRが必要と考える。

演題8 岩手医科大学歯学部第2口腔外科の最近3年間に於ける入院患者の臨床統計的観察

○沼田 与志晴, 小川 光一, 佐々木 正道,  
佐藤 憲太郎, 松本 断, 関 重道,  
関山 三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

今回われわれは、昭和50年4月1日より、昭和53年3月31日までの3年間に岩手医科大学歯学部第2口腔外科に入院加療を要した患者476名について、統計的観察を行なったのでその概要を報告した。

年度別推移は、50年度が最も多く、1年間平均入院

患者数は158.7名であった。月別では、ほぼ一定で、1カ月平均13.2名であった。年齢別では、30歳代が最も多く、性別では、男264例、女212例で男性が女性をやや上廻っていた。診断別では、炎症110例が最も多く、嚢胞85例、腫瘍71例、奇形67例、外傷65例の順であった。1症例平均入院日数は39.5日間であった。炎症は、非特異性炎、歯性感染が多く、嚢胞は、術後性上顎嚢胞が半数以上を占め、良性腫瘍は、血管腫、悪性腫瘍は、上顎癌、奇形は、唇顎口蓋裂、外傷は、下顎骨々折が各々多かった。患者は、県内外いたるところより来科入院しており、歯科医院からの紹介が多かった。他科への依頼・兼科数は、241回にもおよんでいた。また地域社会、医学部との関係密着化、浸透化が進んでいることがわかった。転帰は、ほとんど軽快退院したが、死亡は12例で、これはすべて悪性腫瘍であり、剖検率58.3%であった。

質 問：甘利 英一（小児歯科）

年度が進むにつれて、入院患者数が減少して来ているが、この点どの様に考えているか？

全国的にみてここ2、3年住民の医師はなれが生じている。かかる現象の一端かと思われるが。

回 答：演 者

外来新患数は年度が進むにつれ増加していることから、1つには、社会における口腔衛生状態が改善されてきている結果ではないかと思う。一方では、悪性腫瘍患者が増加し長期間病床を使用するため、病床の回転が悪くなりかえって入院待機患者が多くなっている現状である。

質 問：高宮 達治（歯科薬局）

1. 抜歯における薬物アレルギーが見られたとのことですが、薬物アレルギーを起した薬剤は何か。

2. なお、投与中止例がなされた薬剤は何か。

回 答：演 者

キシロカイン、ペニシリン系抗生剤などでしたが、今回は統計的に観察したので詳細な内容については充分調べていない。

質 問：石川 富士郎（矯正歯科）

前演題とも関連して同じような考え方もできるのですが、とくに大学病院という、或いは本学部のおかれた環境下で、入院ということはその前提には手術や治療行動が種々考えられるわけです。従って入院そのものに人為的なコントロールが生じているのではないのでしょうか。

（例えば、卒業研修のための入院とか、研究教育用として一つの症候群なり、疾患群に対して積極的に入